

## 受賞の言葉

やまもと いさむ

2003 年ブラウン大より  
Ph. D. (経済学) を取得。  
14 年より慶応義塾大学商  
学部教授。1970 年生まれ。



くろだ さちこ

2009 年慶応義塾大学  
より博士号(商学)を取得。  
14 年より早稲田大学教育・  
総合科学学術院教授。  
1971 年生まれ。



## 働き方を見つめ直す一助に

慶応義塾大学教授 山本 勲

早稲田大学教授 黒田祥子

日々、忙しく仕事をしている多くの人々にとって、自らの働き方を客観的に見つめる機会はありません。自分の働き方にどの程度の無駄があり、どのように改善すればより効率的になるのかを当事者自身が把握することは、なかなか容易ではない。我々は 2 人とも 10 年以上、勤め人という立場で組織の中で働いていたが、学界に転身してはじめて、そのことに気付いた。勤め人という経験をもつ研究者の役割として、企業で働く人の立場を踏まえながら、客観的に日本人の働き方を見つめ直すきっかけとなる研究ができないだろうか。本書は、こうした考えから、働き方の実態や課題を客観的かつ多角的に明らかにすべく、積み重ねてきた研究をまとめたものである。

日本的雇用慣行は、多大な人的資本投資による高スキルの形成や雇用の安定性などのメリットも多く、そこで形成された働き方には一定の経済合理性があったと考えられる。しかし近年では、少子高齢化やグローバル化といった大きな環境変化に晒される中で、そうした働き方は時代にそぐわなくなったとも言われる。日本人の働き方のうち、維持すべき部分と改善すべき部分はそれぞれどこにあるだろうか。こうした問題意識のもと、本書では、労働時間の実態把握や国際比較、労働時間規制の影響、長時間労働の背景と長短所、企業でのワーク・ライフ・バランス施策のあり方、長時間労働の健康面への影響などについて、データや経済理論、計量経済学的手法をもとに検証を重ねた。今回素晴らしい賞をいただけたことは研究者としてこの上ない栄誉であり、研究を支えてくださったすべての方々にも心より御礼申し上げます。

本書で示したさまざまなエビデンスが働き方を議論する際の基礎的な材料として活用され、結果的に、少しでも望ましい働き方の実現に貢献することができたら、研究者として望外の喜びである。本書の執筆を終えた後も、働き方を巡る議論は続いており、いかに我々が取り組んできた研究課題が大きくて、また、解明されていない点が多いかを痛感している。受賞に甘んじることなく、すべての人々が幸せにいきいきと働き、かつ、競争力が高まっていくような働き方を探求する実証研究を今後も続けていきたい。